学生の記録から見る子どもの音楽活動の可能性

Possibilities of Children's Music Activities : The Analysis of the Records of Students

中　武　亮　子

Ryoko NAKATAKE

Ⅰ．はじめに

筆者は宮崎学園短期大学に保育科の教員であると同時に宮崎学園短期大学付属の「こども音楽教育センター」で音楽療法士として障がいのある子どもに対する音楽療法の実践をしている。

筆者が本学の『教育研究』平成１９年版に引用した岡本夏木の著書「幼児期―子どもは世界をどうつかむか―」の中に、「今こそ『幼児期』を見直す作業が必要だということを痛感するのは私だけでしょうか。今日の幼児の世界は早くからおとな社会の強大な圧力にさらされています。（中略）幼児期においてこそ形成されるべき人間の生き方の基礎があるにもかかわらず、その獲得が不十分なまま、子どもたちはおとな社会へ投げ出されてゆきます。それは「幼児期の空洞化」とも呼ぶべき現象です。」（岡本2005：2）という一節がある。この「幼児期の空洞化」は、自分の音楽療法の実践や保育音楽の授業を行う際に、いつも意識している言葉である。

今回、保育科の教員として、自分の専門とする音楽の中で「幼児期の空洞化」について考えていくきっかけの一つとして本テーマを取り上げる。

Ⅱ．目的

本研究では、保育実習や幼稚園教育実習を体験した保育科の学生が、「幼児音楽療育実習」を通して、障がいのある子どもに対する音や音楽の活動の中で子どもをどう捉えているかを考察する。

また、考察の結果見えてきたことと、幼稚園教育要領・保育所保育指針の中で音楽表現に求められているものとを比較検討し、保育科の学生が幼児音楽療育実習を履修する意義と、乳幼児期の音や音楽の活動に見る子どもの発達への可能性を探る。

Ⅲ．方法

宮崎学園短期大学付属こども音楽教育センターでは、現在８名の音楽療法士と１名の心理士が、約８０名の子どもたちの音楽療法を行っている。本学認定の「幼児音楽療育士」取得を目指す本学保育科の学生は、２年次に同センターの音楽療法に参加する「幼児音楽療育実習」を必修科目として受講する。本研究では、この実習を行った学生の記録を、子どもの捉え方という視点で分類、考察し、幼稚園教育要領・保育所保育指針の保育内容表現に記された事項と比較・検討する。

Ⅳ．結果

１．幼児音楽療育実習を行った学生の記録

以下の記録は、毎回の実習記録の中で、その回の学生の感想を述べた記述の一部である。これらを、記述内容から五つに分類し、分析した結果を記す。

（１）「セラピストと子どもの『受容・共感・信頼』という関係についての記述」

・今その子が何をしたいのかを読み取り、その子の気持ちを満たす活動を行っていくのが療育だとわかった。

・子ども達は自分のために一生懸命になり、一緒に喜びを分かち合ってくれる先生に心を開いていく。セラピスト、子ども達、保護者の方それぞれの信頼関係を築いていく事で日々の活動は成り立っているのだと思った。

・ドラム演奏ではセラピストの方と子どもが一体となったように感じた。

・子どもたちに合わせてセラピストの方が動いていて、子ども一人ひとりの状態を理解することがとても大切であると勉強になった。

・できたことに対して十分に褒めることの大切さが改めて分かった。

（２）「多感覚による音や音楽の遊びの可能性についての記述」

・子ども達は音楽を体験する事で、今まで感じられなかったたくさんの世界に触れることができるし、たくさんの人と出会うことができる。子ども達が心を開いてくれる環境作りの１つとして音楽があるのかなと感じる事ができた。

・表現の難しい子どもにとっては、いつもは体験できないたくさんのスポットが当てられ、小さな表情も捉えて欲求を満たしてくれる場になっている。

（３）「子どもの遊びの原動力が『楽しさ』であることに気付いている記述」

・どの子も、音楽自体を楽しみながら行っており、障がいのある子どもにおいては音楽の内容を知るのではなく、自分が出す音に興味を持って、それを楽しんでいるだけでもそこから徐々に成長していくのだと感じた。

・子どもも主体的に取り組めて、それぞれ強弱をつけたりして楽しんでいる様子が印象的で、子ども達が自らやろうとする意欲、興味、関心を持つ事で内容の濃いセッションができると感じた。

・子どもたちが楽しんでいるということは、子ども自身が活動に関心を持っているということであり、逆に関心を持てない子どもは別のことをしているか、じっとしているかである。

（４）「音楽遊びが子どもの発達に関わっていることについての記述」

・指先の細かい発達、物事の理解、またその活動をするまでの興味・関心、先生や他の子ども達とのコミュニケーションなど、１回の実習の中で多くの視点を置くことができた。

・音や音楽を通して、言語、認知、身体の発達が促され、かつ、他の子ども達と一緒に時間や物を共有して存在も意識できるようになれる。

・音楽を活用する事の利点は、音を聞きながら身体を動かす子どもを見ることで、その子どもの成長や、足りないものがわかるということだと私は思った。

（5）「子どもとしっかり向き合って音楽活動をすることの難しさについての記述」

・息を合わせたり、１つの区切りとして息を吸ったりすることの大切さも知る事ができた。
・セッションの中で絵本を読んだときに、子どもの様子を見ながら、一緒に声を出してくれる先生とタイミングを合わせるのは楽しくもあり、大変でもあると思った。
・音楽の力は大きいと思うが、安易な気持ちで使えない。
・保育実習で知的障がいのある子ども達に自分の気持ちを伝える事の難しさを痛感していたので、音楽療法のセッションは簡単な事ではないのだと思った。
・子どもたちがどうしたらその活動に関心を持つようになるのか、そこがとても難しい部分である。それは保育にも繋がることである。子ども自身の特徴を把握しながら活動を考えていかなければならないことを改めて実感した。

２．学生の記録の考察

（1）「セラピストと子どもの『受容・共感・信頼』という関係についての記述」

これらの記録から学生は、セラピストと子どもの受容・共感・信頼という関係に気付いていると思われる。子どもの音楽療法において担当のセラピストは、子どもが「今」どのような状況で、何を伝えようとしているのかを「その瞬間」に感じて音や音楽で返していくことが必要である。そのためには、子どもの心身の状況や環境等を理解し、子どもの出す音や動きなどすべての表現をまず受け入れ、子どもと「同質」の状態になることが要求される。その状態の中で子どもは、セラピストを、自分を受け入れてくれる存在として認識すると考える。そこから生まれてくるセラピストと子どもとの信頼関係があって初めて、子どもとのコミュニケーションが可能になると考える。幼児音楽療育実習を受講した学生は、自らが実習現場で保育者と子どもとの関係を観察したり、「先生」として子どもの前に立ったりした、学生自身の体験から、セラピストと子どもの関係を、実感を伴いながら観察していたと思われる。

（2）「多感覚による音や音楽の遊びの可能性についての記述」

音や音楽は、その１つ１つが意味を持っていると考える。１つの音を出すこと、音楽を演奏することで、その音や音楽自体が持つ意味や、音を出している人の心身の状態が、聴いている人に伝わる可能性を持っていると言える。

これらの記録から学生は、自分を表現することが難しく、他者との関係が取りづらい子どもであっても、セラピストが音や音楽でさまざまな感覚に働きかけることで、他者や外界への意識が広がっていく可能性を持っていることに気づいていると思われる。

（3）「子どもの遊びの原動力が『楽しさ』であることに気付いている記述」

これらの記録の中で学生は、「楽しい」ということが活動の中で、子どもの遊びの原動力になっているということに気付いていると思われる。筆者は、この楽しさこそ、子どもの活動の中で音や音楽が使われる最大の理由であると考える。障がいのある子どもたちは、自分自身で楽しさを生み出すことが得意ではない場合がある。しかし音や音楽の中には「楽しさ」という多くの人が共通に感じる要素があり、セラピストが子どもに「楽しい」と感じる音や音楽を提供することで、子どもは楽しみながら音や音楽と共に動き、さらに周りの人と一緒に動くことで、自分自身では難しいコミュニケーションをする可能性が生まれると考える。子どもたちは、楽しさに共感しながら音や音楽と共に動くことで人とつながっていく可能性があると言える。

（4）「音楽遊びが子どもの発達に関わっていることについての記述」

子どもを数多く観て、子どもの発達を実感してきた保育科の２年生は、言葉によるコミュニケーションの難しい子どもたちが音や音楽の遊びの中で動く様子から、子どものさまざまな心身の状態、コミュニケーションの様子を観察している。筆者も実践において、初めのうちはセラピストが提供する楽しい遊びの中で満足している子どもたちにも、様々な活動を続け感覚が満たされるうちに、次の発達へ行こうとする欲求が見えてくると感じている。その時セラピストが子どもたちに、次の発達に見合った遊びを提供すると、子どもたちは新しい遊びの中に再び楽しさを見つけていくことを体験する。学生はこのセラピストと子どもたちの音や音楽によるやりとりが、子どもの心身の発達を促していく可能性を持っていることに気付いていると思われる。

（5）「子どもとしっかり向き合って音楽活動をすることの難しさについての記述」

保育科の学生は２年間で保育所（園）、幼稚園、施設において実習を行い、多くの乳幼児、障がい児と関わる体験を持っている。その中で保育者が一つの活動を行うまでの準備の大変さを知っており、自分自身も「研究保育」等で体験していることから、子どもと共に音や音楽の活動をするためにもさまざまな準備が必要であると感じている。また、十分な準備を行ったつもりでも、実際に子どもの前に立つと予想外のことが起こり、思い通りに活動が進まないという体験もしている。そのようなことから、音や音楽が保育に欠かせないものであると理解しながらも、子どもと共に、自分自身が音や音楽を使いこなして活動を行うことの難しさにも気付いていると考える。

３．保育における音楽表現で目指すもの

音や音楽による表現は、「幼稚園教育要領」および「保育所保育指針」においての、「保育内容表現」に含まれる。これは、いずれも「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現力を養い、創造性を豊かにする」ことを目指しており、「ねらい」においては、「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ」、「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」、「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」ことが

挙げられている。「内容」においては「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」それぞれの表記が異なっているが、乳幼児期の教育や保育において、「遊びの中で子ども達が五感を通して感じ、主体的に動き、考えたりイメージしたりしたことを伝え合う為に行う具体的な事項」が挙げられている。この中で子どもたちは、生涯を通してのあらゆる表現の基礎を、この時期に身につけることが期待されている。日常の教育や保育においては幼稚園教諭及び保育士が、子どもの豊かな表現が実現されるように配慮し、そのための援助を行う。

Ⅴ．考察

今回、幼児音楽療育実習の学生の記録と、幼稚園教育要領・保育所保育指針「保育内容表現」の比較から、以下のような共通点が見えてきた。

まず、両者とも子ども達の五感を使った多感覚な活動を行うことの大切さを述べていることである。人は本来、「聴覚」「視覚」「触覚」「嗅覚」「味覚」の五感を通じて自分や他者の存在、周りの環境を意識している。われわれの生活の中で、これらの感覚が単独で使われることはなく、多くの感覚を使うほど、様々な事象を豊かに感じる体験ができ、その豊かな体験が豊かな心を作っていくと考えられる。また、音や音楽は、人のすべての感覚に、ノンバーバルに働きかけることができる道具の一つであることから、特に言語での意志疎通が難しい幼児や障がい児とのコミュニケーション遊びに適していると言える。

次に、両者ともコミュニケーションの大切さを述べていることである。最も身近なコミュニケーションの方法として声を出すということがある。順調な発達をしている子どもたちは、当たり前のこととして声を出し、歌を歌うが、人が声を出そうとして発するまでには様々な感覚を使ったプロセスがある。山下恵子は「声の生成プロセスについて―ハンディキャップのある人を中心に―」の中で、「人は気持ちを表すために人に向かって声を出す。出された声は人々のさまざまなコンテクストと結びつき、新たな声を遊びながら新たな人と共に生み出していく。声を発する自己があり、自らの身体から出てくる声を聴く自己があり、そしてその声を聴く他者があり、その声に対して応答する他者の声がある。そこには聴覚のみならず視覚や触覚などの感覚を使った豊かな遊びの空間が創出されている。そして遊びの空間の中で、そこにいる人々の気持ちを表す声、一人ひとりの歴史を反映する声が現在という瞬間に重なり合った時、共にあるという感覚は生み出される。人は共にある瞬間を目指して声を出すのではないだろうか。」（山下2005：126）と述べている。楽器の音や音楽からも、五感を通して様々なものがその場にいる人に伝わる。音や音楽には一つ一つに意味があり、例えば大きな太鼓の音には「大きい」「迫って来るもの」「丸いもの」などを表し、小さな鈴の音は「小ささ」「かわいらしさ」などを表す。また、弾んだ長調の音楽は「楽しさ」や「喜び」、静かな短調の音楽は「悲しさ」や「寂しさ」といった意味を持っている。松井紀和は、音楽療法の中で音楽が治療道具として使われる特性の１つとして「音楽が知的過程を通らずに，直接情動に働きかける。」（松井：1980：2）と述べている。このような音の意味が、聴いた人の心に直接伝わり、子どもや障がいのある人ともコミュニケーションを取ることを可能にしている。また、この音や音楽によるコミュニケーションの積み重ねが、後に言語でコミュニケーションを取る時の感覚を作る基礎にもなっている。音楽療法では、人は様々なプロセスを経て音や音楽と多感覚につながや音楽を通じて周りの人とつながり、環境とつながっていくというコミュニケーションの中で心

身の発達が促されていく。

さらに、両者とも遊びを取り入れる必要性を述べていることも共通点と言える。中島恵子は、著書「音と人をつなぐコ・ミュージックセラピー」の中で、遊びについて次のように述べている。「音・音楽を使う活動は、『楽しい』ということがベースになります。」（中島2002：62）「遊びは、子どもの『楽しい』の発達にともなって変化していき、それぞれの発達の段階で、さまざまな形の遊びに展開していくのです。」（中島2002：63）。幼児は、それぞれの発達に合った遊びを主体的に行う中で心身の発達が促されていく。学生達が記録の中に書いている「楽しそう」という記述は、音や音楽の活動が「遊び」としての要素を持っていることを表している。幼稚園教育要領・保育所保育指針の「保育内容表現」にも、さまざまな「遊び」の中で子どもの発達が促されることが期待される記述がある。子どもに「遊ぶ力」を付けていくことが、「生きる力」を付けていくことにつながると考えられる。

音や音楽は万能ではない。しかし、音や音楽があることで活動がスムーズに運んだり、楽しさが増したりすることは多い。保育の現場に、音や音楽の持つ意味に気付き目的を持って使いこなす指導者の存在があれば、より豊かな表現の活動が展開されると考える。また、子どもたちが音や音楽に気付き、感じることは、人の心に気付き、感じることにつながり、子どもたちが音や音楽の活動の中で表現しようとすることは、自分の気持ちや考えを人に伝えるために表現しようとすることに繋がる。そのことから、保育者を目指す学生が、幼児音楽療育実習において音や音楽で遊ぶ子どもの姿を観て学ぶことは、保育の現場で子どもの可能性を期待していくことを学ぶ機会になると考える。

Ⅵ．おわりに

筆者は、宮崎女子短期大学（現宮崎学園短期大学）発行の『教育研究』「幼児にとってのあそびと音楽の意味」の文末に「現在子どもたちを取り巻く環境が必ずしも良いものではないと感じていることは冒頭にも触れたが、さまざまな状況から子どもたちの心身の感覚はこれからますます鈍くなっていくのではないかと考える。子どもの学力低下をどうするかさかんに論議されているが、その中に、子どもの感覚の鈍化を憂える論議はあまり無いように思える。自分の専門が音楽であるので音楽と子どもの発達について取り上げたが、本当の学力を向上させるには、五感を磨き、何においても実感を持って学んでいくことが大切なのではないかと感じた。」（中武2006：46）という一文を著した。その後、筆者は音楽療法の実践を通して、音や音楽が人の発達、とりわけ乳幼児の心身の発達に大きな影響を及ぼすことをますます実感している。

本学保育科の学生は、最初の保育所実習に、さまざまな不安を持って臨む。しかし、幼稚園実習や施設実習を経て行う２度目の保育園実習においては一人ひとりが成長し、子どもを観る眼が備わってくる。今回、学生の記録からも、子どもの心身の動きや発達を鋭く捉える記述が多く見られた。筆者も、子ども音楽教育センターにおいて、子ども達と共に音や音楽の中で遊ぶことのできる幸せに感謝しながらさらに研鑽を積み、その学びを将来多くの子どもに関わる学生達に、授業の中で伝えていきたいと考える。

参考文献

岡本夏木「幼児期―子どもは世界をどうつかむか―」岩波書店　2005
厚生労働省「保育所保育指針」チャイルド本社　2008
中島恵子・山下恵子「音と人をつなぐコ・ミュージックセラピー」春秋社　2002
中武亮子『幼児にとってのあそびと音楽の意味』「教育研究第３号」宮崎女子短期大学　2007
松井紀和「音楽療法の手引き」牧野出版　1980
文部科学省「幼稚園教育要領」　チャイルド本社　2008
山下恵子「声の生成プロセスについて―ハンディキャップのある人を中心に―」
　　お茶の水女子大学博士論文　2005